

陰陽思想と太陽神

柴山鳥人

大倭国（やまとのくに）発祥の地は、天照らす日の神が領（しら）す国、千希し（筑紫）島の白日別、筑前国早良郡下山門村、福岡県福岡市西区下山門御手洗神社。

目 次

9の01	春秋半年暦と陰陽	1
9の02	斎宮暦と天照大神	2
9の03	千五百人と倭面土	5

9の01 春秋半年暦と陰陽

西暦紀元前62年春分から秋分を元年として春秋半年暦で斎宮暦が始まります。

春秋半年暦だったことは、魏志倭人伝で推測されているように「正しい暦の使い方ではなく、春の耕作と秋のとり入れをもって、年を数えている」のではなく思想的な意味があると考えます。

考えられるのは陰陽思想の影響です。大倭国は陰陽思想の影響を受けた国だったのではないのでしょうか。

ウィキペディアから引用します。

「陰陽（いんよう）とは、中国の思想に端を発し、森羅万象、宇宙のありとあらゆる事物をさまざまな観点から陰（いん）と陽（よう）の二つのカテゴリに分類する思想。陰と陽とは互いに対立する属性を持った二つの気であり、万物の生成消滅と言った変化はこの二気によって起こるとされる」

「原初は混沌（カオス）の状態であると考え、この混沌の中から光に満ちた明るい澄んだ気、すなわち陽の気が上昇して天となり、重く濁った暗黒の気、すなわち陰の気が下降して地となった。(略)」

「受動的な性質、能動的な性質に分類する。具体的には、闇・暗・柔・水・冬・夜・植物・女、光・明・剛・火・夏・昼・動物・男などに分けられる。これらは相反しつつも、一方がなければもう一方も存在し得ない。森羅万象、宇宙のありとあらゆる物は、相反する陰

と陽の二気によって消長盛衰し、陰と陽の二気が調和して初めて自然の秩序が保たれる。重要な事は陰陽二元論が、この世のものを、善一元化のために善と悪に分ける善悪二元論とは異なるという事である。陽は善ではなく、陰は悪ではない。陽は陰が、陰は陽があつてはじめて一つの要素となりえる。あくまで森羅万象を構成する要素に過ぎない。(略)」

1年を春分の日から秋分の日までと秋分の日から春分の日までの二つに分けた春秋半年暦を使っていた陰陽思想を持った人々が大倭国の始まりを創ったと考えます。

分子人類学の進展により、日本人がどのように形成されたのかが分ってきました。

Y染色体のハプログループのDの系統の狩猟民が北から日本列島に入り込み、その後、Oの系統の農耕民が大陸から入り込みます。

陰陽思想は農耕民でなければ想像しえない考え方ではないでしょうか。農耕民の大陸からの渡来人が日本に陰陽思想を持ち込んだのでしょうか。

Dの系統の縄文人が日本語の母体となる言語を話していたと推測します。

縄文人が圧倒的に多数で渡来人は少数だったため、大陸から日本列島に渡ってきたOの系統の渡来人とその子孫も縄文人との交流が進むと、おのずと縄文人が話していた言葉を使用するようになったのでしょうか。少数だった渡来人とその子孫はより高度な知識と技能を持ち、継承していて、縄文人よりも有利に多くの子孫を残すことができたと考えます。渡来系の人々の使用する言葉は現地の縄文人の言葉になりましたが、持ってきた知識と技能と思想は子孫に継承されたのでしょうか。

陰陽思想を持つ渡来した農耕民は自分たちを天つ神の子と、在来の狩猟民を国つ神の子と考えたのではないのでしょうか。

9の02 斎宮暦と天照大神

古事記の始まり、イザナキとイザナミの登場の前に遡ります。

『天と地とがはじめて姿を見せ、アメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カムムスヒの独り神が成り出て身を隠します。ウマシアシカビヒコヂ、アメノトコタチの独り神が成り出て身を隠します。この五柱の神は別天つ神と呼ばれます。

それにつづいて、クニノトコタチ、トヨクモノの独り神が成り出て身を隠します。

ウヒヂニ、つぎに妹スヒヂニ、つぎにツノグヒ、つぎに妹イクグヒ、つぎにオホトノヂ、つぎに妹オホトノベ。つぎにオモダル、つぎに妹アヤカシコネ。つぎにイザナキ、つぎに

妹イザナミが成り出で、神世七代と呼ばれます。』

ウヒヂニからイザナギまでの5代の神は、妹と合わせて二柱の神で一代とされています。

西暦紀元前62年春分の日から始まる初代ツキヨミのカムヤマトイハレ日子の白日別と辛酉の年の西暦紀元前60年正月から始まる初代スサノオのニニギの伊都国の前にも、ツキヨミとスサノオの体制の国があったのではないのでしょうか。

筑前国早良郡（さわらのこおり）飯盛山の東にある吉武高木遺跡から、三種の神器の鏡・玉・剣が揃って見かった木棺墓が見つかっています。鏡はアマテラス日の神を、玉はツキヨミの巫女を、剣はスサノオの王を象徴していると考えています。

大倭国が始まる前、紀元前2世紀頃、吉武高木遺跡にはスサノオである王のウヒヂニとツキヨミである斎宮の妹スヒヂニとの国があり、五代続いたのではないのでしょうか。

この国の最後の王のオモダルがオオヤマツミ、妹とされる斎宮のアヤカシコネがオホゲツヒメだと想像します。

海を支配するニニギ（ニギハヤヒ、カムヤマトイワレビコ（初代神武））が、クシナダヒメ（スガノヤツミミの娘、阿多の小櫛の君の妹アヒラヒメ）を妻として子ヤシマジヌミ（ウマシマチ、タギシミミ、物部氏の祖先）が産まれます。

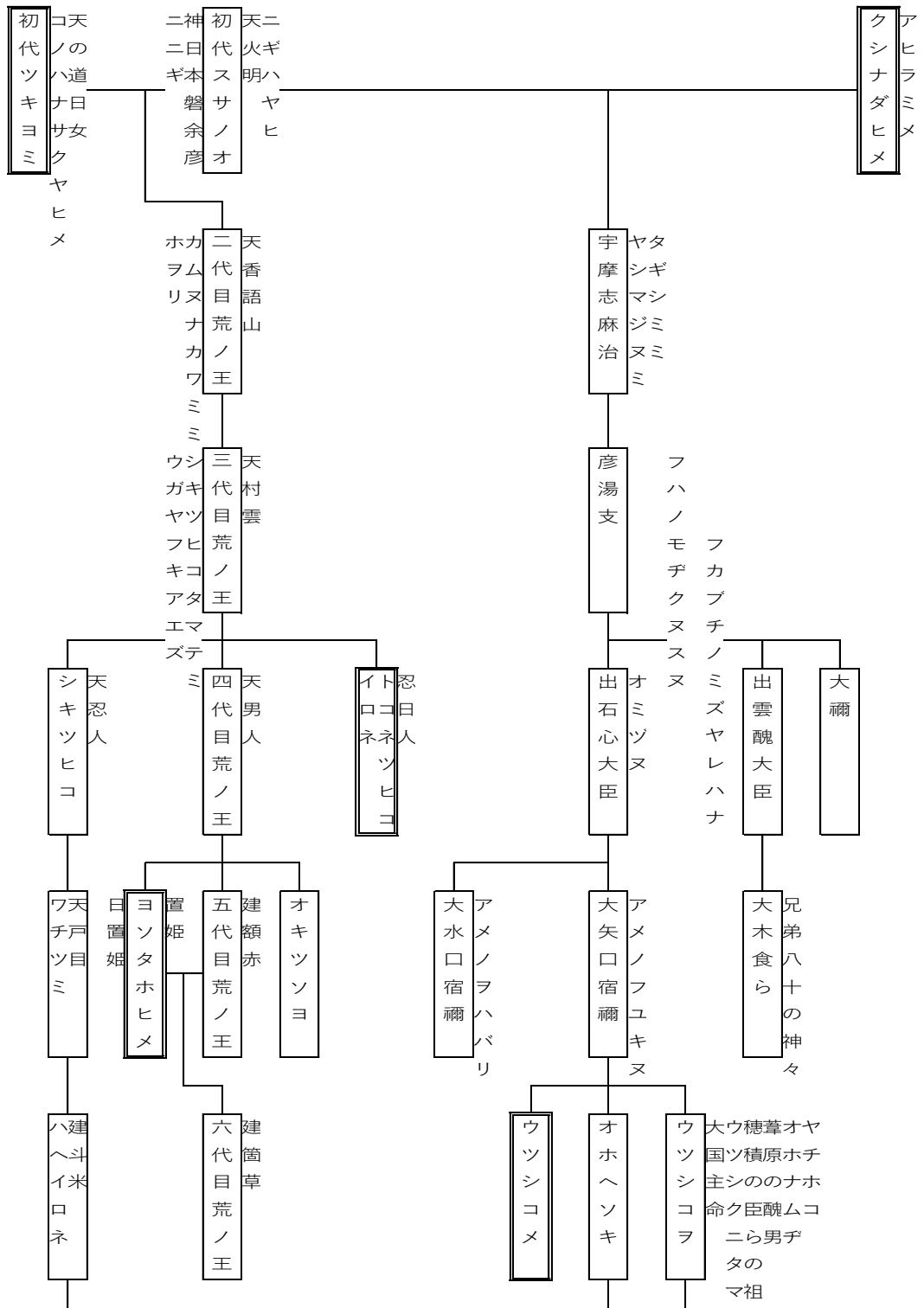
ニニギは吉武高木遺跡にあったオモダル（オオヤマツミ）と妹アヤカシコネ（イザナミ、オホゲツヒメ）との国を攻め滅ぼします。ニニギが西暦紀元前62年春分の日以前の王族の娘カムアタツヒメ（コノハナサクヤビメ、カムオホイチヒメ、天の道日女）を初代ツキヨミ、斎宮として擁立します。初代斎宮は西暦紀元前88年秋分から87年春分の間産まれ、斎宮暦76半年の西暦紀元前25年秋分から24年春分の間逝去します。享年は127半年、63歳です。

初代の斎宮暦4半年の西暦紀元前61年秋分から60年春分の間、辛酉の年の西暦紀元前60年正月に初代斎宮からニニギは初代スサノオに任命されます。

初代スサノオ、ニニギの後、次男のホヲリの母のコノハナサクヤビメの血統が、長男のウマシマジの母のクシナダヒメの血統、物部氏の系統より、より重要視され、大王はこの系統で続きます。

宗像神社に係するクシナダヒメも高貴な血統です。

飯盛神社に係するコノハナサクヤビメの血統はそれよりも重視されたのです。



アマテラス太陽を祀る巫女のツキヨミ、コノハナサクヤヒメがスサノオ、ニニギに青草人を支配する正統性を与え、辛酉の年に伊都国が始まります。

『イザナミとイザナキの二柱の神は、ミトノマグワヒをして国を生もうとします。イザナミが主導してうまく事が運ばず、イザナキが主導してようやく国を生み終わります。』

イザナミが誘って国が順調に生まれていたのを、後世の人が付け加え変えてしまったのではないのでしょうか。

ツキヨミがスサノオより優位なのは、ツキヨミがアマテラスを祀る神官でスサノオの任命権があるためでしょう。

渡来した人々の陰陽思想と太陽信仰が大倭国の起源となる集団の中では共通の考えであり、この思想は神道の元なのでしょう。

古代の倭国の体制は現在の日本国の体制に似ています。

アマテラスは憲法、ツキヨミは国会、スサノオは内閣総理大臣です。

スサノオの内閣総理大臣はアマテラス憲法に基づきツキヨミの国会の議決により指名され、それにより天皇から任命されます。

かつてスサノオだった天皇はツキヨミの機関としての役割を担っています。

9の03 千五百人と倭面土

『その後さらに神々を生み、火の神を生んだためイザナミは死んでしまい、出雲の国と伯伎の国との境の比婆の山に葬られます。

イザナキはイザナミをひと目見ようと黄泉の国へと行きます。

しかし、見ないでと言われたにもかかわらずイザナキはイザナミの姿を見てしまい、その醜い姿におそろしくなり逃げ出します。恥をかかされイザナミは追いかけますが、イザナキは大岩で道を塞いで逃げ切ります。

「あなたの国の人草を、ひと日に千頭（ちがしら）絞（くび）り殺してしまいますよ。」
とイザナミが言うと、イザナキは

「お前がそうするというのなら、われはひと日に千五百（ちいほ）の産屋を建てよう。」
と言います。そのため葦原の中つ国では、ひと日に必ず千人（ちたり）の人が死に、ひと日に必ず千五百人（ちいほたり）の人が生まれることになります。』

イザナミを祀る飯盛神社、飯盛山はイザナミを塞いでいる大岩であり、飯盛は千五百（ちいほ）の産屋、千五百人（ちいほり）が由来でしょう。

『やっとのことで葦原の中つ国に戻ったイザナキは、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐の原に出向き禊を行い神々が生まれます。禊の果てに左目からアマテラス、右目からツキヨミ、

つぎに鼻からスサノオが生まれます。』

早良郡に小戸の地名があります。

博多湾に面し、東側に名柄川、西側に十郎川が流れています。

名柄川の水源は千五百人（ちいほり）山、飯盛山です。

近くにJR下山門（しもやまと）駅があります。

古地図には下山門村が記載されています。

上（かみ）の山である千五百人（ちいほり）山より流れる名柄川と十郎川の二つの川が下流でせまった所に「御手洗神社」があります。

オモダルが祀られています。

「面垂る」であり、この地が下（しも）の山門（やまと）であり倭面土国の由来の地でしよう。

なお、早良郡の小戸の近くに能古島があります。

能古島に神社があります。

丹波の籠神社は東征後、ここから移ったのではないかと妄想しています。

初代スサノオ、ニニギの国は三雲南小路遺跡のある伊都国です。

きよめられた、神聖な等の意味を添える接頭語の「斎」が名詞の「都、杜」に接続しているのでしょうか。

筑紫島の四面の筑紫の国、白日別は「治める。占める」の意味があった古語の「知る・領る」から、治める地、大倭国の基となる支配地を指していると解釈しています。

治めるのは、スサノオではなくアマテラスでしょう。

陰陽思想と太陽信仰を持つ人々を郡（こおり）の規模で束ねる有力者達がいる、アマテラスを祀るツキヨミを尊び、各々の領地を支配する正統性を与えてもらっていて、その儀式を行なう場所が山門にあったのではないのでしょうか。

白日別は、ツキヨミに随う国々の集合体、アマテラスの白日別との意味なのです。

なお、名称から新羅もアマテラスの白日別に属していた可能性があります。

ニニギもそのうちの一人のスサノオであり、ニニギの子孫はツキヨミを輩出する一族との特別な地位を利用して次第に周辺のスサノオを統合し、唯一のスサノオとなったのではないのでしょうか。

ただ一人となったスサノオを大王と呼ぶようになったのかもしれませんが。



【著者の出版物】

アマテラスひとイツキヨミことスサノオウ

国生み神話の復元を起点に古事記と日本書紀から復元した大倭国の始まり

著者 柴山 鳥人

アマゾン電子書籍 kindle 版 397 円 (kindleunlimited 対象)

オンデマンド (ペーパーバック) 1,234 円